巻頭言　益川敏英……1
解説　梅林宏道……2

第一章　私はどうして核抑止論を捨てたのか……13

第二章　核抑止の歴史を振り返る……27

独占から大量報復へ……28
英国での論争……29
米国に依存する英国……32
見返りを払う英国……37
米国：大量報復から制御反応へ……42
制御反応から相互確証破壊（MAD）へ……45
対抗価値と対抗戦力……47
先制使用……49
冷戦後の米国の核戦争計画の変化……50
1993年〜97年の米国核戦略見直し……52
NATOの冷戦後核戦略……53
核抑止に関する米国の疑念……59
2002年の米国核戦略見直し……61
米国の核抑止ドクトリンへの影響……64
ブッシュの先制攻撃ドクトリン……66
国防総省による核兵器の先制使用計画の確認……69
フランスのフォース・ド・フラップ（核抑止力）……71
英仏核協定……78
現実は既得権益を凌駕し始めたか……81
オバマ大統領の衝撃……83
まとめ……85

第三章　現実世界での核抑止……97

キューバ・ミサイル危機……98
信憑性への疑問……100
核抑止と主要国間の戦争の不在……104
1986年レイキャビク首脳会談……109
インドとパキスタンの経験……113
自己抑止……116
準戦略核抑止……118

拡大核抑止……122
紛争の拡大は避けられない……123
化学・生物兵器に対する核抑止……124
核抑止は双方向的なもの……128
イラクは第1次湾岸戦争で抑止されたか……131
テロリストたちを核兵器によって抑止することはできない……133
核抑止は安全を損なう……134
核抑止は不安定を生む……136
核抑止は拡散を生む……138
核抑止は民主主義を脅かす……139
警報即時発射……140
まとめ……144

第四章　核抑止と核拡散　イスラエル、インド、パキスタン……153

イスラエルと「サムソン・オプション」……155
インドとパキスタン……171
まとめ……211

第五章　道徳性と合法性……229

道徳的議論の要点……234
核抑止と「正戦」論……236
核兵器と奴隷制……241
核兵器を汚名の対象にする……242
核抑止への法的な疑義……243
1996年国際司法裁判所の勧告的意見……244
NATO核保有3カ国の反応……250
米軍の法的評価……254
英国トライデント、ニュールンベルグ、ブレア首相……256
国際司法裁判所意見へのマイケル・クインラン卿の批判……259
トライデント・プラウシェアズ対スコットランド高等裁判所……263
スコットランド高等裁判所判断の誤り……266
まとめ……269

第六章　より安全な戦略……277

代替方法を見つけなければならない必要性……278

考え方の転換……284
テロリストと核の脅迫……289
安全保障に核抑止は必要ない……291
自己抑止を強める……292
核戦力の厳戒態勢の解除……294
核兵器禁止条約交渉の開始……296
非核兵器地帯の推進……301
核兵器の常任国連安全保障理事国からの分離……307
核抑止から非挑発防衛へ……308
ＮＡＴＯへの非核戦略……309
不正行為の防止策……314
永続する核兵器のない世界を得る……316
まとめ……321

第七章　終わりに……331

用語集……343
あとがき　安斎育郎……355